

も基督教も回々教も皆此處に行はれた、無論之に伴なふて諸種の文字も輸入せられ美術も流行した、これらのことは支那、波斯などの歴史に記載せられてあるけれども、もとより邊鄙の地のことであるから極めて漠然たる記述にすぎぬ、そして彼等自身の歴史は或時代を限つた二三のものゝ外は、殆んど今日に知られて居ないのであるからして、政治文化の何れの方面からしても、史上に重要な位置を占むる地方なるに係はらず、その歴史は極めて渾沌たるものにすぎないのである、けれどもその多くが既に文字を用ゐた國であり、殊には幸か不幸か濕氣なき沙漠の砂は多くの古國をその中に埋めて居るのであるからして、親しくその地に行つて遺跡をたづねたならば、何等か此地方の歴史を今日より以上に明らかにすることができ、ひいて隣接諸國の史上にも光明を與ふることが出来るであらうとは、極めて見易き道理なのである、近く埃及やバビロン、カルデアなどの歴史が段々明らかになつて來るのは、好箇の先例を示して居るものと云はねばならぬ、然るに交通の不便な爲でゞもあらうか、此地方の史跡探検なるものは極めて近頃迄行はれてないで、多くの歴史家も考古學者も殆んど之を度外視して居る様に見えた。學問のことゝ云へば非常な困難を侵して研究に耽る歐洲人も、前世紀の末つ方迄はまだ此方面には着手しなかつたのである。千八百八十九年に英吉利の軍人バワー (Bower) 氏がクッチャ (Kutcha) で或る文書を得たのは、實に東洋學者に對する一種の刺激材であつた、これに興味を呼び起して以來、だんくと此方面に注意する様になつたと同時に、グルム、グルジマイル (Groum Grjimalo) 氏やスベン、ヘディン (Sven Hedin) の様な旅行家地理學者が、しきりに此處に埋没して居る遺跡のことを紹介したので、千八百九十七年以後は英、獨、露等の諸國が殆んど競走の姿で探検隊を派して研究に從事せしむる様になつた、西洋ばかりではない日本でも既に前後一回に及んで大谷伯爵の